

## 新出のN氏所蔵上方絵について

松 平 進

### 一

所蔵者の希望で名前を公にできないが、ここでN氏所蔵と仮称する多量の上方役者絵は、一九九四年五月七日土曜日の京都新聞朝刊第一面に、スクープとしてカラー写真入りで発見が報じられたものである。紙上識者の意見として、国立劇場理事郡司正勝氏（早稲田大学名誉教授）は、「歌舞伎研究の上でも一級の資料といえる」と述べられた。その後共同通信社を介して日本経済新聞・毎日新聞・神戸新聞等々諸紙が報じたが、今五か月をへて一応の整理を終えたので、その全貌や収集の特色などについて述べてみたい。

なお発見の功績は私にはない。出版物で私の名と勤務先を知ったN氏が、大学宛に手紙を下さり、私が拝見しにお宅へうかがったのが発端である。研究に役立ててほしいという氏の気持と行動が第一の功績である。

## 二

N氏は京染呉服の卸業を営む京都市下京区の旧家である。コレクションは家に伝わったものという以外、その成立に関しては何もわからない。N氏が父親からの伝聞として語るところによると、一八六三年（文久三年）に始まった蛤御門の変（禁門の変）で六四年（元治元年）に火を放たれて一帯が焼かれた。家はまる焼けとなり、その後同一場所にもどり住んだのだが、火災に対処できる蔵の必要性を痛感し、はじめて蔵を建てた。従ってこの浮世絵は火災以後に家に入ったものであるはずだという。

コレクションの現状は、一枚一枚ばらで箱に絵師別に収められている。しかし元は綴じられて十冊の帖仕立であった。N氏は帖をばらした時も表紙を捨てずに保存されている。全て揃いの黒無地の紙表紙で、左肩に題簽を貼る。白地に朱色単辺の枠を描き、左のように記している。

## 第一号

## 古 錦 画 集

また後表紙見返しには、

明治廿一年七月吉良日新改之

拾冊ノ内本主 N 氏

右の「拾冊ノ内本主」は朱書されている。なお十冊のうち九冊が上方絵、一冊のみ江戸絵であった。版画は全てが大判で、細判や中判が混在していないので、十冊の帖は全て大きさは同一である。

所蔵されている上方絵の絵師数七二名、総枚数は七一一枚。絵師別枚数は次の通りである。二十枚を越える絵師名をあげる。

春好斎北洲	96
丸丈斎国広	91
戯画堂芦ゆき	87
寿好堂よし国	79
柳斎重春	36
有楽斎長秀	30
あし川彦国	30
好画堂多美国	22
画登軒春芝	21
その他63名	219

その他の絵師では、江戸絵師で一時期上方に滞在していた柳川重信の15枚を除いては、春頂の8枚、春勢の7枚、春朝の5枚のほかは3〜1枚の絵師がほとんどである。この数字を見てただちに注意されるのは、多作ではない長秀という京の絵師が多く集められていること、大物絵師の春梅斎北英が少数（実際には一枚）であることである。長秀の件は後述する通りこの収集の土着性にかかわり、北英の件はこれも後述するが短期間の収集ということの結果である。

全七一一枚の内訳はほとんどが役者絵で六六二枚、役者絵以外の四九枚は美人画・風景画・風俗画・立版古・見世物絵・奉納絵馬図・人形出遣い図などである。役者絵はこれまでに五〇枚を除いて年代考証ができた。それによると、時期はごく限られた範囲であることがわかる。

文化二年（一八〇五）——四年	63
文政元年（一八一八）——四年	132
文政五年（六二二）——六年	140
文政七年（一八二四）——八年	109
文政九年（一八二六）——一〇年	117
文政十一年（一八二八）——十二年	51
未考証	50

天保年間にかかるものはこれまでの所一点もない。また文化年間といっても、文化二年の一点を除いて全て十一年から文化の終る十四年までの版行であり、文政十二年を下限とするほとんど十六年間に上演された芝居に限ったコレクションなのである。これまで個人や機関に属する多くのコレクションを見てきたが、これだけの多量でこれだけ時期が限られた場合を知らない。一定時期に集中した収集である。

そこで先に述べた春梅齋北英作品が一枚しか所蔵されていないことについてである。北英は柳齋重春と共に、天保期（一八三〇—四三）上方役者絵界を支える主要絵師であるが、その作画の最初は、わずかに文政期にかかる。文政十一年正月から十二年末の文政最後の二年間に、九件十三枚の作品が知られている。対して柳齋重春は、文政四年から十二年までに四十一件七十三枚が判明している。活躍期が北英より七年早く始まるのである。収集時期の限定がここにきわめて明瞭に出ているわけである。

次は有楽斎長秀に関して収集の土着性といった点についてである。長秀という絵師は作画期が長く、寛政十一年（二七九九）から天保末年（一八四三）頃に及んで作品が見られる。役者絵のみならず、美人画や嘶本・滑稽本の挿絵、芝居番付・双六など多方面に作画している。また合羽摺りが多く、「祇園神輿洗い練物図」は特によく作画している。天保のごく初期に大阪で版行された一枚摺り『浪速諸流画人名家案内』には、長秀を「戯士似顔主之部」に分類せずに、「版行下主之部」に分類して、

ほり江旅宿 京有楽斎長秀

と記している。挿絵類で知られた京都の絵師で、大阪にも滞留して活躍していたことがわかる。管見に入った作品数も合羽摺りを除けば、錦絵摺りはあまり多くなく、二十七枚にとどまっていた。今回三十枚が出てそのうち二十一枚が従来未見のものであった。そこでまずその内容を概観しよう。役者名の下に数字は代数。

○ 大阪中之芝居おそめ久松早替り狂言

岩井半四郎。

有楽斎画

綿喜

〔文政三年（一八二〇）九月、中座、お染久松色読販、大判一枚〕

\*傘をさしたお染が久松に早替りする立姿。

○ けい事 早替り

山姥／金時 中村歌右衛門<sup>3</sup>

有楽斎画

綿喜（図1）

〔文政四年（一八二一）九月、角座、山紅葉錦五百機、大判一枚〕

\*紅葉の下、溪流の側。山姥金時二人立姿。

○ 京因幡薬師芝居にて大あたり

奴妻平 谷村楯八

応需長秀画

正吉 吉

仙たにもしはし見とれつ舞台より

谷むらかけし花のまさかり 飛

〔文政十二年（一八二九）三月、因幡薬師、新うすゆき物語、大判一枚〕

\*手に短冊つきの桜の枝。遠景は清水寺。狂歌は「飛いき」か。

大芝居ばかりでなく、このような中<sup>ちゅう</sup>ウ芝居の絵も収集に含んでいる。最初にあげたお染久松の図は、板木を再使用した作品も合わせて所蔵されている。これより三年後に二世沢村源之助が竹田芝居で演じたものである。

○ 竹田芝居<sup>ニ</sup>而 おそめ久松早替り狂言

江戸 沢村源之助<sup>2</sup>

有楽齋画

綿喜

〔文政六年（一八二三）、竹田芝居、お染久松色読販、大判一枚〕

顔も衣裳も彫り改めず旧板木そのままで背景と文字のみ変えて売り出したものである。しにせの版元綿屋喜兵衛らしからぬ杜撰な出版だが、源之助が二年前の半四郎と同じ顔でも問題がなかったのか。この時江戸から上って来たばかりだった源之助だから上方人に馴染がうすかったから可能だったのかもしれない。

文政八年正月角の芝居で三世中村歌右衛門が九変化の所作事『日本新玉九尾狐』<sup>おそめ久松のばけ</sup>を演じた。寿好堂よし国がこれを大判九枚に一枚一役で描いているが、ここにあげる長秀のものは、一枚を四部分に区切って大判二枚で八図を収めている。うち一図には二役を描いて、八図で九役を入れている。各一図は小判の大きさになるわけである。ただしここに描かれた九役は、九尾の狐が無く代りに評判記などにない三浦之助が加わっているのが疑問として残る。これに似た細かな絵に「着せ替え姿」がある。一枚は「<sup>版新</sup>中村歌右衛門再勤大当 きせかえ姿」と題して、石川五右衛門・官兵衛・兵助らを収めている。いうまでもなく切りぬいて裸の歌右衛門に着せて楽しむ玩具絵である。

「再勤」は文政八年三月に一世一代を演じて隠退した歌右衛門が、翌年七月には中座に出演したことを指すのであ

つて、その時の『木下蔭狭間合戦』『極彩色娘扇』の役々である。もう一枚「新刻沢村国太郎当狂言 着替すがた」もあって、同じ時歌右衛門と共に中座で演じたおしづ・おなつ・兵助子筆松などのほか「がくや入姿」もある。女形の場合は裸の姿はなく簡単な着衣姿でその上に着せるのである。これらは当然文政九年七月の作画版行ということになる。立版右（切組燈籠）も二枚所蔵されている。一枚は「はん角の芝居大当 浅草靈驗記切組燈籠」で配役も細かく記してある所から文政十二年三月角の芝居の『浅草靈驗記』とわかる。もう一枚は「大新版難御殿組上臺人形」である。

しかし今回の全く新しい発見は五枚の柱絵である。図柄は西王母・清少納言・寒山拾得・桜下美人（図2）・藤下美人だが、いずれも大判一枚を縦に二分して上半身と下半身を細く描き、これを購入した者が自分で切ってつないで柱絵に仕立てる形になっている。中心部に切線が入っている。長秀の柱絵は従来、すでにつないである三図を見たことがあるだけだった。<sup>(2)</sup> 原型のままのものを五枚も見得たのは役者絵以外の分野だが収獲であった。

有楽齋長秀はしばしば「平安有楽齋」「皇都中村長秀」と署名し、「花洛中村有楽齋」とも記している京の絵師である。またコレクション中には、京都所演の役者絵がかなり多くある。収集自体が京都でなされたと考えていいのではなからうか。先に収集の時期がほぼ十六年間に限られると述べたが、双方を考え合わせると、京に住むある一人の芝居好きが自からの好みで文政五年から十年頃を中心に、大芝居のみならず中・小の芝居の絵も旺盛な意欲で買い集め、やがて止め、その後他から加えられたり他と寄せ集められたり全くしてない純度の高いコレクションといえる。これだけの量で内容にこれだけ混淆のないのは珍しいと思う。絵はくり返し眺められたのであろう。保存状態はあまりよくなく、画面の下方は手ずれが甚しい。コレクションというものは、それを作り上げた人をどうしても反映するものであるが、N氏のこれは京の芝居好きの生活を強く感じさせるのである。

## 三

有楽斎長秀と同様に、従来あまり多作と思っていなかった絵師の作品が、今回かなり多く発見された。彦国・多美国・春芝らがそれである。私の所謂主要絵師北洲・芦幸・国広・よし国らには及ばないが、それに準ずる中堅絵師と考える方がいいようである。

あし川彦国の作品は、従来十七枚を承知するのみであったが、今回の収集中に三十枚を発見、うち十四枚が未見のものであった。二、三例をあげよう。

○ 宮本無三四 中村歌右衛門<sup>3</sup>

彦国画

綿喜

〈文政三年（一八二〇）五月、京四条北側芝居、敵討巖流島、大判一枚〉

\* 右手に折れた柱を抱え、浴衣姿で仁王立ち。

これはすつきりしたいい姿であるが、次の二枚続も図柄がめずらしい。

○ 白井権八 岩井半四郎<sup>5</sup>小姓吉三 嵐小六<sup>4</sup>

彦国画

綿喜

小むらさき 嵐小六<sup>4</sup>八百屋お七 岩井半四郎<sup>5</sup>

彦国画

綿喜

〈文政四年（一八二二）九月、中座、侠詞花川戸〉

〈文政四年（一八二二）九月、中座、其昔恋緋鹿子、大判二枚続〉

この時中座は『木下蔭狭間合戦』の切狂言として、『侠詞花川戸』と『其昔恋緋鹿子』とを出した。前者では半四



郎が白井権八、小六が小紫を演じ、後者では半四郎の八百屋お七、小六の小姓吉三であった。絵は二枚続の手前の方に大きく権八・小紫を描き、雲形に区切って背後に小さく吉三・お七を描くという形になっている。同一演目の二場面を一枚に収めることはあるが、これは珍しい例である。

○ 加賀金沢川上芝居於て大当

三浦之助 中村鶴助<sup>1</sup>

大坂彦国画

利新

〈文政五年（一八二二）三月、加賀川上芝居、近江源氏先陣館、大判一枚〉

のちの四世中村歌右衛門がまだ鶴助の名で修業していた時期の金沢興行だが、彦国の名に「大坂」と記すのは、出先で売るべく大坂の利新<sup>2</sup>利倉屋新兵衛が版行したものであろう。

好画堂多美国は従来十六枚を記録していた。今回二十二枚を見たが、初見が十六枚もあった。多美国は達者な絵師ではないが、三世尾上芙蓉をよく描くのが特色である。

○ 伊賀越 呉服屋重兵衛／渡辺しづま／誉田内記

三役 尾上芙蓉<sup>3</sup> 大当りく

好画堂多美国画

天喜市

〈文政六年（一八二三）、大西芝居、伊賀越乗掛合羽、大判一枚〉

○ 尾陽名こや清寿院芝居におゐて 大当りく

玉矢真平 尾上芙蓉<sup>3</sup>

梅都多美国画

置市

遠きにあるし身を御見捨なく御ひいきの有かたさに

咲て見る水のちからや杜若 芙蓉

〈文政七年（一八二四）三月、清寿院芝居、越前三国夫婦塚、大判一枚〉

\*虚無僧姿。右手に尺八、左手に深編笠持ち、左方をにらむ。

芙蓉ではないが大首絵で、一点優品を見ることができた。

○ 放駒長吉 嵐橘三郎<sup>2</sup>

多美国画

利新

評判をとり出役者の大芝居

ちんこの時の気は放駒 利倉

〈文政六年（一八二三）十一月、中座、双蝶々曲輪日記、大判一枚〉

版元が利倉屋新兵衛（利新）で、版元自身が賛を献じている所が注意される。「ちんこの時」とは、文政四年まで嵐徳三郎の名で小つこ芝居<sup>ち</sup>中々芝居に出ていた事実を指し、その気分を捨てて大芝居で評判をとっているといっているのである。多美国はよし国の門人であるが、例えば次の図によってもそれは確認できる。

○ 名ごや山三 尾上芙蓉<sup>3</sup>

よし国門人多美国画

（欠）

初夢の恋は禿になかりけり 芙蓉

藪入のやの字結びや名古屋帯 よし国

〈文政六年（一八二三）正月、大西芝居、けいせい花絵合、大判一枚〉

\* 袴姿、二本差し。両手に長文の書状を持って立つ。

画登軒春芝は、二十四枚程を従来見ていたが、二十一枚が収集に含まれており、十三枚が新見のものであった。春芝は二世尾上多見蔵を描くことが多い絵師である。文政十年の三作品を紹介しておきたい。

○ 難波の梅蔵実ハ紀ノ浦浪平 尾上多見蔵<sup>2</sup>

画登軒春芝画

本セ 吉

〈文政十年（一八二七）正月、大西芝居、けいせい七草駒、大判一枚〉

\* 竜田川文様ののれん前。天狗・おかめ・猿の面をあしらった衣裳。（図3）

○ 寺岡平右衛門 尾上多見藏<sup>2</sup>

おかる 中山一枝<sup>1</sup>

画登軒春芝画

ワタキ

〈文政十年二月、竹田芝居、仮名手本忠臣藏、大判一枚〉

\*平右衛門刀をふりかざす。お軽両手をさし出す。

○ 村川兵藏 尾上多見藏<sup>2</sup>

画登軒春芝画

本清

おしま藤太郎 尾上芙蓉<sup>3</sup>

春芝画

本清

〈文政十年五月、竹田芝居、敵討兄弟標、大判二枚〉

\*弓矢を手にした二人。兵藏ひざまづき、藤太郎立つ。紅葉の縁先。

文政六年から十年が活躍の中心らしい。人物描写が非常に巧みで、役者がよく生きている絵が多い。

絵師に関して次に気づくのは、梅国・駒国・きし国・とし国など、名前の下に「国」字のつく絵師が多く見られることである。今述べた多美国・彦国もこれに加えていいかもしれない。これらは寿好堂よし国の門人あるいはよし国が代表者らしい寿好堂社という集団に属する者と思われる。この集団については稿を改めて詳述してみたいが、ある芝居摺物で、寿好堂社中として次の名が連記されているのを見たことがある。

きし国 橋国 千歌国 よし直 晴国 三津国 よし幸 政国 むめ国 はつ国 玉国 よし国

末尾に「国」がつくか、前に「よし」がつく者はこの社中の可能性があるだろう。梅国やとし国、芝国、玉国らのいい作品がこの収集には豊富に所蔵されている。後に詳述する多美国・梅国・よし国・政国の四枚続などはこの社中の華麗な合作といつてよい。また従来一枚のみ離れで承知していた次の三枚続もその例である。

○ 登り役者顔見世乗込之図 のりこみの図

登り 関三十郎

豊川とし国画

天キ 伝

中村芝翫<sup>2</sup>登り 浅尾友蔵<sup>2</sup>

登り 瀬川路之助

中村歌右衛門<sup>3</sup>〈文政九年（一八二六）十一月、角座入り〉（図<sup>4</sup>）

三枚続だが、右一枚はとし国単独作、中と左とは一枚中での合作である。

絵師に関して次は、初見の絵師をあげておくべきだろう。清谷・春玉・梅至・五蝶・秀磨がそれである。まず清谷であるが、合羽摺りの絵師としてはつとに承知していたのだが、錦絵では初見である。

○ 典蔵 中山新九郎

〈文化二年（一八〇五）六月、京四条北側芝居、挙禪廓大通、大判一枚〉

清谷

万弥板（図<sup>5</sup>）

錦絵の中でみると非常に風変りな様式と色調である。顔の描写は初期の合羽摺り風の誇張があつて面白いが、色は朱や桃色の目立つ鮮やかな派手なものである。「万弥板」という版元は他に見ていない。清谷について『上方絵一覽』<sup>(3)</sup>は版元より「京都の画家」とされ、

鈍重にして小<sup>7</sup>しの肥瘦もない単純な線を用ひ、彩色も甚簡單であるが独特な愛敬と市井の味を有つてゐる。

と記す。絵の印象から文化末年としたく、二年に疑問を残しているが、中山新九郎の典蔵役をこの時以外に発見できないのでこの年に置いた。

○ 京四条南側ノ芝居<sup>二</sup>而

清水長左衛門 市川紅蔵

北川春玉画

（欠）

〈文政九年（一八二六）三月、京四条南側、絵本太功記、大判一枚〉

豊川清国画

豊川とし国画

天キ 伝

豊川梅国画

豊川とし国画

天キ 伝

\* 袴姿、右手で扇をかざす立姿。

○ (石橋) 中村歌右衛門<sup>3</sup>

はたん見やわれく 敷はおそれあり 芝翫

梅至画

塩長 重

〈文化十三年(一八一六)三月、角座、其九重彩四季桜、大判一枚〉

「三世歌右衛門変化舞踊の役者絵」と題して過日発表したが、さらにこの一枚(あるいは組物のうちの一枚)が加わることになる。

○ 嵐吉三郎事 嵐橋三郎 岡島屋璃寛

五蝶画

(欠)

文政四年己九月廿六日 行年五十三才 顕寛相順璃寛信士

〈文政四年(一八二二)九月、死絵、大判一枚〉

この絵については別に発表した所で、五蝶という絵師は従来未見だが、画風は堂々として風格があり熟練の役者絵師あるいは人物画家という感じがする。

○ 油屋おこん 尾上和三郎

杉山秀麿

柏宗板

卯花や雨露のめくみをうけて咲 梅好

〈年代未考。大判一枚〉

柏宗は京都の版元だが、番付で和三郎の動きを十分に追うことができていない。京の中ウ芝居での文政中期の出演である。

以上で新見の絵師を終って、補足的に絵師の関係で若干述べておきたい。長谷川貞信の初代は天保七年(一八三六)から作品が見られるが、その前天保五年に「五雙亭貞信」と署す大判一枚、さらに文政六年(一八二三)に「貞信」とのみ記す大判二枚続のあることを承知していた。今回文政六年と考えられる次の二作品を見ることがで

きた。

○ ごふくや十兵衛 尾上芙蓉<sup>3</sup>

雲助平作 大谷友治

〈文政六年（一八二三）、大西芝居、伊賀越乗掛合羽、大判一枚〉

○ 渡辺しづま 尾上芙蓉<sup>3</sup>

から木政右衛門 市川滝十郎

〈文政六年（一八二三）、大西芝居、伊賀越乗掛合羽、大判二枚〉

浪花亭貞信画 忠 大坂板元 在原屋忠兵衛

浪花亭貞信画 忠

浪花亭貞信画 忠

浪花亭の号は初見である。文政六年という文化六年（一八〇九）生まれの初代貞信は数え年十四歳ということになる。これらも全て長谷川貞信の作品とすべきかどうか、四代目長谷川貞信氏と種々検討したが、十四歳でも師匠が稽古を兼ねて描かせることはあるということで、初代貞信最初期作品とみている。

残るは役者絵以外であるが、季郷という絵師が初見である。

○ 琴鶴太夫 おふ華 梅松

浜中庵季郷 重

○ 初花太夫 勢山 きみの

季郷画 （欠）

○ 深雪太夫 はやざき 呉紫

季郷画 重

琴鶴太夫には枳形に囲んで槌の印、初花・深雪太夫には扇の印が付けられていて、大阪新町の槌屋・扇屋の太夫図とわかる。この絵師もこういう形の太夫図も従来未見であった。なおこの収集の中には一心斎貞一画の「浪華芸子花魁之図」（大判三枚続）と五湖亭貞景の「風流花遊図」（大判三枚続）も含んでいる。また「浪華坂町伊丹幸小吉」は三味線の稽古をする坂町の芸妓を描く珍しい例で、従来この種のものを見ていない。大判一枚で「江南某楼にて 任好醉中に 梅国」と署名しているのが、生活感があって面白い。こういう書き方も初見である。

## 四

この収集の特色を描かれている内容からいえば、種々の点が考えられるが、中ウ芝居を多く含んでいる点は、特に目につく所である。これまでも、好画堂多美国が美雀を、画登軒春芝が多見蔵をよく描くことを指摘したが、もちろんそれに止どまるものではない。

収集で新見のものの中から、描かれている中ウ芝居役者を列記してみよう。

尾上多見蔵<sup>2</sup>

小川弥太郎

大谷友治

尾上美雀<sup>3</sup>

中村鶴助<sup>1</sup>

嵐三勝

市川滝十郎

谷村楯八

尾上梅之丞

百村百太郎<sup>1</sup>

市川甚之助

中村歌蝶

中山一枝<sup>1</sup>

坂東簀助<sup>2</sup>

嵐富美三郎

嵐芳三郎<sup>2</sup>

沢村源之助<sup>2</sup>

市川茂々太郎

浅尾勇次郎

市川紅蔵

嵐寿之助

片岡市蔵<sup>1</sup>

中村福之助

そのうちの若干を紹介しておこう。

○ 能登頭教経／熊坂長範 二役 嵐芳三郎<sup>2</sup>

国芳画

天喜

京四条南側芝居ニおゐて 大当りく

〔文政九年（一八二六）九月、京四条南側芝居、勝鬨芋源氏、大判一枚〕

○ 桜丸／顔見世三社 あらし芳三郎<sup>2</sup>

芦ゆき画

綿喜

御霊芝居ニおゐて 大当りく

〈文政十年（一八二七）頃、御霊芝居、菅原伝授／三社祭、大判一枚〉

○ 尾州名古屋登り 立役 尾上美雀<sup>3</sup> 罷出相勤申候

多美国画

（欠）

難波かへりて

頭にはあつきめくみをいた、きて帰る旅路のなには菅笠

〈文政七年（一八二四）夏、名古屋より帰阪口上、大判一枚〉

○ 池上七九郎 片岡市蔵<sup>1</sup>

娘初花 小川弥太郎

国広画

天喜

〈文政十年（一八二七）六月、京四条南側芝居、契情会稽山、大判一枚〉

○ 百姓与右衛門 沢村源之助<sup>2</sup>

かさねほうこん 登り坂東寅助

むめ国画

本清

〈文政五年（一八二二）頃、座未詳、大判一枚〉

○ 浜田織部 市川甚之助

寿陽堂とし国画

本清

〈文政九年（一八二六）、大西芝居、も、ちどり鳴門白浪、大判一枚〉

○ 斧定九郎 市川茂々太郎

豊川梅国画

天キ 伝

文政十丁亥三月 願主若太夫

（図6）

〈文政十年（一八二七）三月、若太夫芝居、仮名手本忠臣蔵、大判一枚〉

○ 重井筒通ひ之段 こんや徳兵衛 中村鶴助<sup>1</sup>

ひこ国画

忠



王子酒ちからにしのか寒さかな 芝賞

〔文政四年（一八二二）冬、大西芝居、重井簡、大判一枚〕

○ 玉藻の前 中村鶴助<sup>1</sup>

よし国画

利新

安部ノ保成 市川滝十郎

彦国画

利新

〔文政五年（一八二三）三ノ替、大西芝居、玉藻前曦袂、大判一枚続〕

○ 加藤与茂七 中村鶴助<sup>1</sup>

春好斎北洲画

本セ 泉

時におくれし面影を今さら梓にもものせんもいか、あらんとて板元の心苦しく思はれ侍るに

葉桜の中にまされる遅咲は

春の色香に増こ、ちすれ 鶴明舎

〔文政七年（一八二四）、大西芝居、義臣伝説切講釈、大判一枚大首〕

○ 茂兵衛 百村百太郎<sup>1</sup>

春頂齋北松画

天喜 市

〔文政五年（一八二三）頃、宿無団七時雨傘、大判一枚〕

○ 真柴久つぐ 百村百太郎<sup>1</sup>

彦国画

（不明）

傾城かづらき 中山一枝<sup>1</sup>

彦国画

（不明）（図7）

〔文政六年（一八三三）正月、大西芝居、けいせい花絵合、大判二枚続〕

○ 勇助 百村百太郎<sup>1</sup>

春頂齋北松画

忠義そと見らるる、むねの暑かな 虎青

本セ 住吉（図8）

〔文政六年（一八三三）、大西芝居、有職鎌倉山、大判一枚大首〕

百村百太郎について以前まとめた時<sup>(4)</sup>、『上方絵一覽』に記載の百村百太郎の勇助の大首絵について「この唯一の百太郎の大首絵を見る機会にまだ恵まれていない。」と記したが、この収集の中でようやく手にとって見る事ができた。他にも百太郎の絵姿を記録に加えることができた。

次にあげる重春画の二枚統は、都合六名の役者を描いた豪華なものである。

○ ぐん助 尾上多見藏<sup>2</sup>

女房おきく 浅尾勇次郎

おむめ 尾上梅之丞

野本文治 尾上芙蓉<sup>3</sup>

女房お沢 中山一枝<sup>1</sup>

けいせい玉琴 中村歌蝶

〈文政十年（一八二七）五月、東竹田芝居、達鏡桐檜扇、大判二枚統〉

柳斎重春画

ハタキ 兵善

(図9)

多見藏のぐん助と芙蓉の文治が刀を抜いて争うのを四人の女形がとり囲んで衝立て押さえるにぎやかな図柄である。しかし次の四枚統は寿好堂社の四人の手になる見事な豪華作品である。

○ 小早川帯刀 市川滝十郎

毛利元成 尾上芙蓉<sup>3</sup>

大内高丸 大谷友治

尼子四郎 中村鶴助<sup>1</sup>

〈文政四年（一八二二）一月、若太夫芝居、けいせい花発船、大判四枚統〉

多見国画

伝

梅国画

伝

よし国画

吉

政国画

吉(図10)

以前学会発表で、米国の個人収集の中でみた中々芝居役者十名を五枚統きに描いた「風流鍋島夕すゞみ」(政国・梅

国・歳国・ふじ国・きし国五名の合作、文政七年（一八二四）夏の刊行）を紹介した事があるが、中ウ芝居役者を四枚五枚に描いてパノラマに見せるなど、寿好堂社は特に中ウ芝居後援の集団だったのかもしれない。

中ウ芝居がかかる劇場としては、大西・若太夫・竹田・御霊などがあがり、京では因幡薬師や時に南側芝居があったが、次の二枚はこれまでに見なかった場所である。

○ 於北神明芝居 あこや 中村福之助

千本桜 忠信（尾上多見蔵<sup>2</sup>）

柳斎重春画

ワタキ（図11）

〈文政十年（一八二七）頃、北神明芝居、壇浦兜軍記・義経千本桜、大判一枚〉

○ 川越太郎／岩永左衛門 嵐寿之助

任御好 豊川梅国画

伝

北神明芝居ニおゐて大当りく

〈文政十年（一八二七）頃、北神明芝居、義経千本桜・壇浦兜軍記、大判一枚〉

同じ芝居に福之助・寿之助・多見蔵という大物役者が出たので絵の版行を見たのであろうが、北神明芝居は寡聞にして知らない。番付も見えていないが、大阪の北の神明宮境内であらうか。意外な所での上演を役者絵から知ることになったわけである。

## 五

最後にこれまでの叙述で漏らした点を拾い集めたい。役者絵で口上図と摺物を各一枚あげよう。収集の中に口上図は多いが、長秀が描いた二世嵐吉三郎の口上である。

○ 在憚御目見江 中村小市事 嵐吉三郎悴彦三郎

長秀

元板 草紙屋

吉とむない長口上吉々おけとおしかりもかへりみず

小悴に私幼名彦三郎<sup>ヲ</sup>ゆづりおこがましき御目見へ

何事も吉<sup>よし</sup>なにな<sup>ニ</sup>三ッ吉と御機嫌よふ不調法成

私<sup>ラ</sup>長々御ひいきのよけいをもつて上上吉のはしにもす

かり名も橘の枝さかへいつく迄も末長ふケ様の有

難き御目見へ致よふかさねくも願ひ上升ル

万代のひいき願や鶯の秋 璃寛

さ、啼や千両箱の一トつかね ヒイキ

(図12)

二世嵐吉三郎の口上である事は風貌からも間違いないが、(一)彼の幼名が彦三郎で、(二)中村小市という悴があり、(三)文化末年ごろに小市に彦三郎を襲名させたということがわかる。文化末年ごろとはこの画風からの推定で、(一)から(三)までの事実を確認できる傍証を持っていない。

もう一枚は大判二枚の大きさの摺物で(現状は二枚に離れている)袴姿で並んで歩む父と子の図である。背景などは全くない。

○ 馬之助

芙蓉

先明て庭に雀の御慶哉

芙蓉

物売に御ひいき願ふ君の春 馬之助

銚木の中に目立や福寿草 多美国

芙蓉の子が馬之助を名乗った時の挨拶の摺物と思われる。親子の句に多美国が一句寄せ、よし国と二人で画像を描

多美国画

よし国画

利新

いているのだから、多美国は美雀の支持者なのであろう。絵の感じから文政初年、四年か五年ごろまでと思うのだが、これらの事実を確認する資料を知らない。

次に役者絵以外に目を転じたい。まず人形出遣いの図一枚である。

○ 大坂御霊芝居ニおゐて大当りく

沢井又五郎／いしや左内 出つかい早替り 吉田金四 御好ニ付寿好堂よし国画 天喜

（文政八年（一八二五）九月、御霊境内、伊賀越道中双六、大判一枚（図13））

『義太夫年表・近世編』（寛政—文政）文政八年九月の項に、

はんにや坂の段 一沢井又五郎 一石とめ武助 一いしや左内

吉田金四 右三役とも早がはり出つかひにて相つとめ申候

とある。図には人形二体を遣う二人の人形遣いが描かれているが、風貌は同一で共に吉田金四である。人形遣いの絵も多く出版されたことと思うが、管見に入っただのはこれ以前に一図あるのみできわめて遺存が少い。次に見世物図を二枚見ることができた。

○ 樽の曲もち 江戸 木村与五郎

応而求ニ芦ゆき画 在原屋仕入忠

於難波新地 大当り

○ 江戸 木村与五郎 行年廿四才

浪花よし国画 本清板

大坂難波新地  側ニおゐて大当り

大評判力持の図

（図14）

この時二十四歳の江戸の力持ち木村与五郎の興行である。朝倉無声著『見世物研究』の「力持」の章によると文政期は力持ちの見世物の全盛期だったとのことで、難波新地での興行について詳述されている。木村与五郎はそうい

った江戸下り力持の人気者だったのだろうか。私はこの方面に全くくらいが、『見世物研究・姉妹篇』の「見世物版画年表」を参看しつつ、このような錦絵が珍しいものであると推考した次第である。

以上でN氏コレクションの豊富と稀少とを報告するという責任を一応果たすことができたかと思う。

# 注

- (1) 松平稿「三世歌右衛門変化舞踊の役者絵——文化末年の上方を中心に——」(『甲南国文』第四十一号、平成六年三月)に詳述。
- (2) 『上方絵一覽』第百十八図「美人菖蒲ハッ橋」「久米仙人美人洗足」及び阪急学園池田文庫所蔵「清少納言」。
- (3) 黒田源次氏著、昭和四年刊。合羽摺の章五四(九四)ページ。
- (4) 「百村百太郎——中ウ芝居の役者——」(『甲南女子大学研究紀要』第二十六号、平成二年三月)
- (5) 同書「浪花錦絵」の章八六(二二二)ページ。
- (6) Dean J. Schwaab 氏著 [Osaka Prints] 六九図にカラー版で所収。同図揃いはN氏所蔵のうちにも含まれている。



図3 尾上多見蔵 (春芝)



図1 中村歌右衛門 (長秀)



図5 中山新九郎 (清谷)



図2 桜下美人 (長秀)



図4 関三十郎・中村芝翫・浅尾友蔵・瀬川路之助・中村歌右衛門（とし国・清国・梅国）



図8 百村百太郎（北松）



図6 市川茂々太郎（梅国）

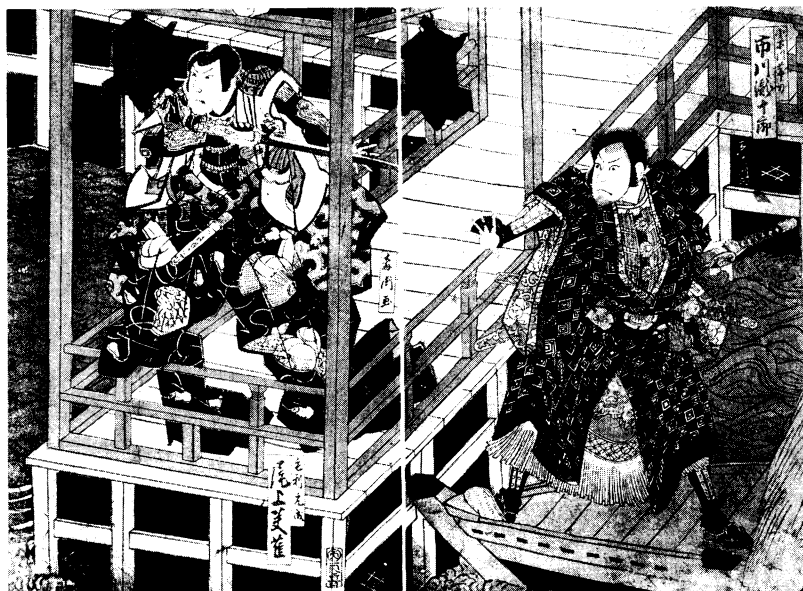




図7 百村百太郎・中山一枝(彦国)



図9 尾上多見蔵・浅尾勇次良・尾上梅之丞・尾上美雀・中山一枝・中村歌蝶(重春)



鶴助 (多美国・梅国・よし国・政国)



図 12 嵐吉三郎・梓彦三郎 (長秀)



図 11 中村福之助・尾上多見蔵 (重春)



図10 市川滝十郎・尾上芙蓉・大谷友次・中村



図14 木村与五郎 (よし国)



図13 吉田金四 (よし国)